



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 山我哲雄著『VTJ 旧約聖書注解 列王記上1～11章』日本キリスト教団出版局、2019年                                      |
| Author(s)        | 高橋, 優子                                                                            |
| Citation         | 基督教學, 55, 22-26                                                                   |
| Issue Date       | 2020-07-20                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/92823">https://hdl.handle.net/2115/92823</a> |
| Type             | journal article                                                                   |
| File Information | 04takahashi.pdf                                                                   |



山我哲雄著 『VTJ 旧約聖書注解 列王記上一（一一章）』（日本キリスト教団出版局、二〇一九年）

高橋 優子

VTJとは、ラテン語のシリーズ名Vetus Testamentum Japonicumの略であり、Vetus Testamentumは「旧約聖書」Japonicumは「日本の」を意味する。これは日本の聖書学者によって日本語で書かれた本格的聖書注解シリーズである。実はこれまで、日本語でアクセスできる注解シリーズは存在していたが、それらはすべて翻訳であり、日本の聖書学者が執筆するものも散発的であつて、キリスト教の正典たる旧約・新約六六書を網羅するものではなかった。その点において本シリーズは記念碑的な企画なのである。マルティン・ルターによる宗教改革五〇〇年を記念する二〇一七年から刊行が始まっている。ルターがそれまで一

般人には読めなかったラテン語の聖書をドイツ語（自国語）に訳したことによって、プロテスタントにおいて万人祭司主義が成立した経緯が共通了解事項として背景にあるのである。

評者がアメリカの神学大学院の学生だった頃、釈義の講義で「注解を書くためには一節に平均二〇時間かかる（かけなくてはならない）」と教授から聞かされ、おそろしく骨の折れる作業だと思った。その手続きは単語の分析からはじまり、文・段落・文書さらには正典全体のレベルまで、わかりきっていると思われることもひとつずつ精査するものである。さらにその文書の歴史的背景や編集過程、著者やその執筆意図、ときには影響史まで論じる壮大なプロジェクトとなる。当然のことながら旧約聖書の場合、ヘブライ語やアラム語の知識があるだけでこなせる作業ではない。正確な言語学的知識の他にも、量産される二次文献を逐時フォローする勤勉さ、またその複雑な研究状況や文献の状況をわかりやすく説明する能力が要求される。注解書、それも自国語で書かれた注解書を最も必要とするのは、聖書を学ぼうとする一般信

徒や、毎日牧会に追われる牧師たちであるからだ。

本書の著者である山我哲雄氏は、本シリーズの監修を担当する四人の旧約学者の一人であり、まだ数冊しか出ていないシリーズのモデルを提供している。【翻訳】【形態／構造／背景】【注解】【解説／考察】の順でブロックごとに記述される本文は、大方の必要に応える内容となっている。本書は列王記上の一―一章だけで四五一頁に及ぶもの（ほとんどミスはないが、無害なタイポが四か所、誤解させる恐れのあるミスが一か所だけある。後者は一六〇頁「九節 第二区」の二―三行目の「丘陵地帯（シェフェラー）」とあるところだ。「低地（シェフェラー）」あるいは「海岸平野（シェフェラー）」と修正すべきであろう）であるが、参考書というものは、詳しくれば詳しいほどありがたいものである。

注解書において注目すべきは、「緒論」と「解説」あるいは「考察」である。これらは執筆者によって大いに異なる可能性がある。緒論には、どのようなスタンスで注解が書かれるのか、文書観や執筆者の哲学が表明され、それに沿って一貫した解説・考察が行われる。とくに申

命記史書と呼ばれるもの（申命記から列王記下まで）をどう捉えるかについては研究者の間でも議論が紛糾しているため、緒論を飛ばして読むことはお勧めできない。もっとも注解書というものは一頁目から最終頁まで通読することを予定しておらず、たいていは急いで説教の準備をするために、必要な箇所だけを読むことが多い。とはいえ、緒論の重要性は強調してもしすぎることはない。本書の緒論中、神殿関係資料に言及しているところは非常に示唆的である。言われてみれば確かにそのとおりなのであるが、評者はこのような列王記の理解に出会ったことがない。

列王記はある意味で、少なくとも南王国側の文脈について見れば、エルサレム神殿がいかにして建設され、維持され―あるいは蔑ろにされ―、そしてついにはいかにして破壊されるかを語る歴史書でもあると言えよう。（二四頁）

なるほど聖書の物語では、ダビデは神殿建設を試みなが

らもヤハウエに止められ、ソロモンがやっと神殿を建設することになるのであるが、その神殿が建設され、維持されている間には、神殿神学を生じ、ほとんど偶像崇拜的な神殿理解にまで発展する。預言者たちはそれを批判し、神殿などではなくヤハウエに対する信仰こそが重要なのだと訴えたのであった。この第一神殿が破壊された後も、第二神殿が破壊された後さえも、ヤハウエ信仰が歴史の闇に消えることなく、いわゆる「アブラハムの宗教」として現在の世界人口の半分以上に影響を与えていることは驚くべきことである。ソロモンの神殿建設が、神殿なしでの宗教的営為が確立するための第一歩となったことは、歴史の皮肉ともいえる。

「緒論」の「成立（申命記史書の一部として）」というセクションでは、旧約聖書学において中心的な論点である申命記史家（申命記にみられる神学をもとに、申命記史書を編集した人あるいは人々）について説明してある。M・ノートが捕囚期の「ひとりの」申命記史家を提唱して以来、ドイツ語圏ではもっぱら数次にわたって編集を行った捕囚期（さらに捕囚後）の申命記史家（たち）が

論じられてきた。それは国家滅亡と捕囚という大惨事によつて生じたヤハウエ信仰の正統性についての懐疑を晴らす試みであった。大惨事の中での営みである以上、それは全体として悲観的な傾向を持つものとなった。神義論問題と呼ばれる問題が中心的な課題であつて、申命記史家たちは、その答えを、ヤハウエとの誓約を破った民の罪に求めたのであった。もちろんヤハウエに立ち返れば、祝福を受けられるという希望も語られる。これに対して北アメリカやイスラエルでは、申命記史書の二段階編集説が受け入れられてきた。ただ二段階であるというのではなく、主たる編集が王国時代に（ヨシヤ王の時代に）行われ、従たる編集が捕囚期に行われた、という説である。F・M・クロスが提唱したこの説は、王国時代の編集には楽観的なトーンが、捕囚期の編集には悲観的なトーンが見られ、それらが申命記史書の中にないまぜになっているという見方である。そして山我氏は基本的にはクロス説に立っていると言つてよからう。

…筆者は、前述のクロス学派（…）に近い立場に傾いて

いる。逆に、史書が最初に書かれたのが王・国・滅・亡・後・で・し・か・あ・り・え・な・い・こ・と・を・示・す・、積極的理由は、私見によればほとんど見当たらない。そもそも、後述するように、エルサレム神殿を唯一の正統的聖所とし、この原理原則を尊重したかどうかで歴代の王たちを肯定的、もしくは否定的に評価する著作が、よりによってその聖所が破壊された後に初めて書かれたと想定することには、やはり無理があるように思われる。(三三二頁)

この立場から本書は、かなりの程度整合的な資料の分離に成功している。周知のとおり、聖書とは多くの矛盾と穴を含んだ文書群であるが、それは聖書が様々な時代の様々な共同体を代表する人々によって書かれたからだと言ってよい。それがまがりなりにも統一体として受け止められているのは、そこに整合性をもたらしとした編集者たちがいたからであろう。もちろんそれぞれ別の神学や目的による編集を行ったゆえに、混乱が生じているのであるが、近代旧約学はそれを整合的に理解しようとする歴史を持つのである。聖書を、玉ねぎの皮を剥くよ

うに「正しい」か「正しくない」か、で選り分け、結局何も残らなくなる、という歴史的批判的方法への批判には確かに一理あるとはいえ、細かく資料や著者を分けていくという旧約学者の性は、聖書は本来整合的な内容を持つものだという前提から出発しているものと考えられる。それは信仰を掘り崩すように見えて実は信仰を保持しようとする近代以降の必要に応じた営みであって、その意味では申命記史家や歴代誌家と動機は同じなのかもしれない。ダビデとは違ってソロモンの歴史的事実を証拠立てるものは、何も存在しないのに、旧約学者はソロモンについて真面目に論じているからだ。もちろん「証拠がないことはそれが存在しなかった証拠ではない。」〔第一部へのまえがき〕中の五一頁〕しかし証拠がないことを信じることを人は信仰と呼ぶのではないか。

山我氏の注解書について特筆すべきは「解説／考察」のおもしろさである。山我氏がすぐれた話者であることには定評があるが、その面目躍如と言ってよいのがこれらのセクションである。大岡裁きに触れたり(一四六頁)、信長・秀吉・家康に触れたりもする(一七六頁)。

であろう。

さらに映画や音楽等の現代文化との関わりにもたびたび触れられる。最新の研究成果を前提するだけでなく、現代日本人にとって既知の事項と結び付けて現在化しているところが有意義である。評者にとって興味深かったのは、「ソロモンは動物について語った」と書かれているところが後にソロモンが「動物と語った」と理解されるようになったことの後日譚である。動物行動学者コンラート・ローレンツが『ソロモンの指輪』というタイトルの自著につけた理由がわかった（二八五頁）。またソロモンの子を宿したという伝説についての記述（三六四頁）は、昔読んだ一九八〇年代にエチオピアからイスラエルに「帰還」した人々についてのニュースとつながった。ソロモン諸島という地名の来歴も興味深い（四二八頁）。古代オリエント世界と現代世界についての該博な知識が、THERE AND THEN と HERE AND NOW を架橋し、無味乾燥になりがちな注解書を読み物としても成立させている。列王記上下、歴代誌上下を担当する著者による続編が待たれる。それらは長く定番となること